

実行委員長の迷いと葛藤

先週、学園祭が終わりました。代休の2日間寝続けたにもかかわらず、まだ疲れが抜けないという実行委員長の宮城愛理さんに話を聞きました。

中1の時に学園祭の実行委員を経験してから6年間。高3になったら自分で実行委員長をやりたいと思い続けてきました。

中1の自分を巻き込んでくれたように、みんなを巻き込んでいける学園祭をつくってみたい。そうして念願かなって務めることになった実行委員長でした。しかし、終わってみれば、「必ずしもハッピーエンドではなかった」と言います。

今年の学園祭のテーマは、「テーマなし〜やりたいことをやりな祭〜」でした。他の全校行事である体育祭や音楽祭に比べて枠が少なく、多様な企画や表現

が可能な学園祭。その特性を最大限に生かそうと提案されたテーマでした。校舎前に土俵を作って相撲を主催する企画、ゴーカート、3階のベランダからロープをつるしたUFOキャッチャーなど、多様な企画がのびのびやれたことは結果的によかったと感じています。

しかし、愛理さんはこのテーマに当初から違和感を抱き、実行委員会で「こんな無責任なものでもいいのか」などと発言してきました。「今、社会も無責任な方向に流れている」「やりたいことがやれる絶好の環境ではあるが、逆に可能性を狭めることもある」。彼女の嗅覚が社会や日常の学校生活からそんなことを感じ取り、立ち止まるべきだという意識を生んだのです。

一方、いくつかの候補を全校で投票すると、断トツでこのテーマに票が集まりました。愛理さんは、6年間大切にしてきた思いと投票結果の大きな「ズレ」をどうすることもできないまま、学園祭を終えました。「私が主役」ではないけれど、全校行事としてみんなが共有すべきものがあることで初めて意味が生まれる。――。彼女はそう信じて、「みんなの思いを無視すれば国会みたいになるよ」との声に、迷いも感じていました。いまだに自身の気持ちにピリオドを打つことができていません。

これから、実行委員会としての総括の作業が始まります。単なる運営上の反省会にするのではなく、彼女の抱えた葛藤についても話し合ってみたいと考えています。彼女もそれが6年間の終わりにふさわしい自分の課題だと受け止めていきます。(自由の森学園理事長 鬼沢真之)